

# 第一章 幻の友好におぼれるなかれ

## 1 遠交近攻は世の倣い

多くの日本人は、中国や韓国、北朝鮮と仲良くしたいが、「友好」が容易でないことを知っている。彼らの国では、「反日」教育が行われ、「歴史」と「領土」という近隣国ならでは、厄介な事象で口汚く日本人の感情を傷つけるからである。

その「歴史」も「領土」も信賴できるものであれば日本人も納得するのだろうが、戦後、米国による七年間の占領（日本再起不能戦略）の中で作り上げた「反日」教育が戦略的に進められ、作り話を交えた洗脳システムが完成しているから根が深い。

「南京大虐殺」事件も米国人が作った話として知られているが、仮に一時的に、「友好」関係が築けたとしても、日本の、限らない譲歩が無いかぎり、あっけなく崩壊するのは、彼らの「友好」が、「謝罪」と「朝貢」を前提にしているからに他ならない。

日本は、「反日」教育の史実を糾し、領土問題を国際法廷にゆだね、それらの諸問題を解決せずして、真の、「友好」があり得ないことを理解しておくべきであり、遠交近攻の現実を認めるべきなのである。

古の時代から「対等」の交流がないのは悲しいことではあるが、「反日」教育を続ける熾国への対応は慎重であるべきにも関わらず、「友好」に幻想を抱く日本の親中政治家は、国際社会に例を見ない純粋さで国を導いているように見える。

六〇七年頃、聖徳太子によって遣隋使（文化使節）が派遣された。その後、奈良・平安時代、（六三〇年から八九四年）まで続いた遣唐使は、朝鮮統一をもくろむ、新羅との関係悪化や航路の厳しさだけでなく、唐の衰退と朝貢の要求が過大になったなど諸説あるものの、結果として菅原道真公（右大臣）の献案によって廃止された。

一二七四年には、元の時代の中国と高句麗時代の朝鮮が、連合を組んで日本を侵略し、日本人を大虐殺した。七年後も再び侵略があり、多くの日本人が殺害された。

一五九二年から七年間は豊臣秀吉の朝鮮出兵が行われた。これが韓国の「反日」教育の原点であるが、その後の、植民地統治の恨みを合わせて、「反日」教育に利用しているのが韓国であり、日本を侵略した「元寇」の侵略を棚に上げ「日清戦争」「シナ事変」を侵略として、「反日」教育をしているのが中国である。

明治の世にも、中朝との交流はあったが、文明開化の動きを分かつとしない彼らに嫌気がさした明治政府は、ついに付合いきれぬと、「脱亜入欧」をきめ、そこから、日本の方向が定まり、先進国入りへのきっかけを掴むことになるのである。

福沢諭吉翁が明治初期、「時事新報」紙上に掲載した社説が後に「脱亜論」と呼ばれているが、「脱亜入欧」論には諸説あるも、その「説」の精神と決断が、日本を世界の列強に侵略されない国に押し上げたのは、紛れもない事実であろう。

日本は、大陸、朝鮮半島民族から距離を保って生きてきた時代があつたが、だからこそ発展した時代でもあつたのである。ムリをして「友好」にこだわるのが必ずしも日本のためにならないことは戦後の関係から見ても明らかではある。

現在、「日中友好」の妄想に酔い痴れている親中派と呼ばれる人々は、先人の決断から我が国を学び、「悪友を親しむ者は、共に悪名を免かるべからず」の意が、現在の負の「歴史認識」に決別しないかぎり、敗者の歴史が永遠に子孫を苦しめることと「同義」であることを理解しなければ、「反日」のそしりは免れないだろう。

人々の努力も空しく中国や朝鮮との関係は、後年・賢人と称される人物によつて、その交流に疑問符が付けられてきたのは貴重な史実と言つべきであり、「友好」が保たれることが容易でないことを教えているのである。

アジアは列強の侵略を受け、朝鮮に出兵した日本が、一時期これを植民地とした。後に満州を狙つた、ロシアの南下を防ぐ為、満州に進出したことが、日露戦争の発端となり、勝利した日本軍が満州滞在中に日中戦争の下地が作られていったのである。

このような歴史からも「元寇」の子孫である、中国、朝鮮民族や、前の大戦終了間際に不可侵条約を一方的に破棄して、満州に駐留中の日本軍に襲い掛かったロシアとは、常に微妙な関係にあることを忘れてはならない。

平成の道真公や福沢諭吉翁の出現が待たれるが、「日中」には、歴史的にも民族的にも大きな壁が立ちふさがつており、残念ながら、一度として対等の歴史がなかったことでも分かるように、「交流」は慎重でなければならぬのである。

小泉首相の靖国参拝で、「アジア外交」が壊れたと言つ論調や、土下座外交をしてきた政治家は、道真公や諭吉翁の品格とは無縁のものではあるが、そもそも、アジア外交とは何ぞやであり、「アジア外交」が壊れたと言つ何が壊れたのだろうか。

政治家や評論家は首脳会談が開催できないと嘆いて見せたが、悪意ある隣人との交流は慎重になるのが常識であることは、国家も民間も同じであり「反日教育」があるかぎり、中国の本音が、「友好」に無いことは厳然とした事実である。「壊れたアジア外交」などという言葉で国民を欺いてはならない。

政治家は、今や中国とは切つても切れない互恵の関係にある…と真の姿に眼を瞑ろうとするが、小泉政権が思い通りにならないと見るや、民間交流を大々的に求めてきたことと分かるように、支援を求めているのは工場と先端技術が欲しいだけなのである。

経済交流は親日の国々にシフトすべきであり、蒙古に支配されていたとは云え「元」の時代の中国や朝鮮が日本に侵略しては虐殺を繰返していたように、執拗に「反日教育」を続けていることから眼を逸らすべきでない